

## 「海老沢有道氏の『日本聖公会歴史資料解題』の整理

諫山禎一郎

私は、日本聖公会の管区文書保管委員として、毎週火曜日に朝から夕方まで新宿区矢来町にある管区事務所に出勤して、資料整理と国内外からの問い合わせ、来客に対応している。また、港区芝公園にある日本聖公会東京教区事務所に資料保全委員長として毎月第2、第4火曜日に朝から夕方まで出勤して同様の仕事をしている。今回は、その仕事の一端を紹介する。

このような整理をするようになったのは、先年、当時品川区戸越公園にあった国文学史料館（今は立川市に移転）にあった「アーカイブス・カレッジ」という前期1ヶ月、後期1ヶ月の聴講料無料の講座を聴いたことが大きい。ここは、修了論文を提出することが義務であった。聴講生の大半は現役大学院生で史学専攻が多かったが、社会人にも奨めたいと思う。この講座は、聴講料タダなので、もっと知られていいと思う。その後、現在全史料協（全国歴史資料協議会の略、各縣市町村などの資料館の組織）の個人会員になっている。

この講座受講が縁になり、一昨年だったか、世田谷区上北沢にある賀川豊彦記念館でキリスト教アーカイブスの集いが開催され、各教派の人たちと懇談する機会に恵まれた。東京基督教大学の主催だった。その意味では、今回編集、出版した杉浦貞二郎編「神学研究」誌目次集は、超教派の研究者たちの論文が集められていることを強調したい。また、海老沢有道師の「日本聖公会歴史資料解題」は、立教学院チャペル・ニュースに65回、連載されていたものだが、海老沢師が元キリスト教史学会会長であったこと、学会員有志の支援もあり、聖公会内部にもこの連載を知らない人があったことから編集、出版に至ったものである。

また、日本聖公会史談会を2ヶ月に1回程度、管区事務所会議室で開催している。色々なテーマで

1 時間半講演をお願いして、30分討議をしている。その講演の集大成を年一度「日本聖公会史談会」会報」として出版している。

そのほか、現在、整理中のもの、整理が終わったもの、今後受け入れるものを羅列した。

くわしくは、下記までお問い合わせいただきたい。

日本聖公会管区事務所 03-5228-3171

### 最近、完了したこと

1. 日本聖公会史談会報 第7号の編集、出版（年1回発行）
2. 2012年9月 山縣與根二師 日記(5)の編集、出版（年1回発行） 2012年11月
3. 海老沢有道「日本聖公会関係史料解題」の編集、出版 2012年12月
4. 杉浦貞二郎編「神学研究」誌の目次集 編集、出版 2012年12月

### 現在、進めていること

1. CMS系の宣教紙「東京教報」のコピー、整理 現在整理中
2. アメリカ聖公会系の宣教誌「教界評論」の欠号補充、整理一応完了
3. SPG系の宣教誌「日曜叢誌」の欠号補充、整理 今井丞治師の寄贈待ち
4. 個人寄贈資料の整理、目録作成（順不同）
  - ①菅田吉(立教大教授)・美奈子(日本女子大教授) 文庫 800件
  - ②小林正男(北関東教区聖職) 文庫 1050件
  - ③貫民之介(東京教区聖職)・小川徳治(立教大教授) 文庫 243件
  - ④伴君保(東京教区聖職) 文庫 173件
  - ⑤竹之内瑞男(東京教区聖職) 文庫 600件
  - ⑥小笠原重二(中部教区主教)・忍(東京教区聖職) 文庫 367件
  - ⑦福島忠男(北関東教区聖職) 文庫 14件
  - ⑧今井家三代資料(殆どは東京教区にある) 19件
  - ⑨斎藤章二(北関東教区聖職) 文庫 76件

- ⑩ 立教女学院資料 ほかに「神学研究」誌あり 60件
- ⑪ 「はこぶね」戦前版 伊藤堅逸(東京教区聖職)発行、第1号～34号(一部欠号あり)
- ⑫ 朝鮮聖公会資料 戦前の朝鮮聖公会報を含む 180件
- ⑬ 清瀬聖母教会資料 内田稔(東京教区聖職)関係とケリー論文を含む 124件
- ⑭ 竹田真二(東京教区聖職)文庫 ベゼ・マキムの紙芝居を含む 14件
- ⑮ 諫山文庫 立教学院チャペル・ニュースとキリスト教史学会報を含む 200件

### 今後整理するもの

- 1. 松坂勝雄(東京・横浜教区聖職)文庫の目録作成 約350件
- 2. 聖公会新聞バックナンバーの整理 現在整理中
- 3. 「神学の声」の整理 これから欠号を調査
- 4. 東北教区磯山聖ヨハネ教会資料 「神学研究」誌受領済
- 5. 新着資料の整理、目録作成 一部目録作成

### 「東部バプテスト聯合婦人会の成立時期」

原 真由美

#### I 婦人宣教師とバイブル・ウーマン

1875年婦人バプテスト外国宣教師協会 WABFMS (Woman's American Baptist Foreign Mission Society) からアンナ・H・キダー (Anna H Kidder)、クララ・A・サンズ (Clara A Sands) の二人の婦人宣教師が派遣された。婦人宣教師は、自分達の働きを補助し、婦人や子供達へ直接伝道する役割をするバイブル・ウーマンを個人的に雇用了。その給金、活動資金は、婦人宣教師の持つ基金や資金でまかなわれた。最初のバプテストのバイブル・ウーマンは、サンズやキダーが日本婦人を雇い、伝道のために教育し、養成した。日本の各地で男子宣教師が果たせない役割、都会や地方の地域での戸別訪問、日曜学校、幼稚園教育、学校教育、授産等の活動を行った。この伝道活動から婦人達との交わりを深め、婦人達を教会に導いている。教会では日曜学校や婦人達の小集会を起こし、次第に婦人信徒

を獲得していった。各地に設立した教会、講習所では婦人達の小集会を基に婦人会が創られ、日本の風土に適した方法で婦人達の意識改革を図っていった。

#### II 大正時代の婦人団体運動

##### 1. 大正デモクラシー

明治期初めからキリスト者の第2世代が活躍する時代へと進み、宣教師や婦人宣教師が中心となっていた伝道活動から日本人を中心にする活動へと変化していった。

大正時代は政治、社会、文化の各方面に民主主義、自由主義の「大正デモクラシー」と言われる活発な活動が起こり、キリスト教の各派は、大正の頃には、その特徴や性格が明確になりつつあった。キリスト教を信じる婦人達団体もこの機運に活発に活動を始め、大正デモクラシーとよばれる時代の中で、婦人達は権利に目覚め、声を上げはじめた。

##### 2. 広がる婦人運動(官製によらない婦人団体)の成立

1919年(大正8)年に結成された新婦人協会は婦人の社会的、政治的、権利獲得を目指し平塚らいてう、市川房枝、奥むめお、賀川はる、長谷川初音らが中心となっていた。新婦人協会は、初めての全国規模の女権主義団体となるが、その一員であった長谷川初音は組合派初の婦人牧師で東部バプテスト聯合婦人会結成に大きな影響を与えている。

#### III 東部バプテスト婦人聯合への働き

##### 1. アメリカバプテスト外国伝道協会の外国伝道方針の変更

1910年に独立していた婦人外国伝道協会と外国伝道協会が合併し計画的、組織的、効率的に運営できるよう組織が変更された。新しい計画を策定するようになり1923年以降に計画が実行され、宣教師の削減、宣教拠点の廃止、学校の廃校が行われた。

##### 2. 婦人協同委員会の形成の経緯

婦人宣教師会は、アメリカの婦人ボードからの予算に係する女学校、幼稚園等への配布の査定、人事問題への独自の権限を保持していたが、婦人宣教師達は早く日本の婦人達の自立が進み日本での婦人達の伝道を日本婦人自身がするべきであると考えていた。婦人宣教師会は、指導的な立場で

教会婦人会の働きを推進させるために大正末期の1924年から東部婦人内外協同委員会を組織する準備を始めており日本側の婦人委員が選挙によって選ばれた時点で協同委員会を公式な組織にしようと思図していたがそれはかなわず結局のところ、準備委員会に終始した。

#### IV 東部バプテスト聯合婦人会の成立

1. 大正期の高揚した社会背景の中で、バプテストの高揚期には、婦人達による婦人大会が開催されるようになり東部バプテストにおいても大中都市域である関西地域の関西バプテスト婦人会と関東地域（東京・横浜）の東京バプテスト聯合婦人会も、この全国的な婦人達の婦人会設立活動に呼応する形で生まれていった。

1917年（大正6年）「関西バプテスト婦人修養会」於：大阪女子神学校で開催

「関東バプテスト婦人修養会」開催

1918年（大正7年）「大阪拡張運動婦人会」

「第二回関西バプテスト婦人修養会」開催

1919年（大正8年）「東京バプテスト聯合婦人会」5月、11月

1920年（大正9年）「大阪拡張運動バプテスト婦人大会」3月、5月、10月

「東京バプテスト聯合婦人会」5月、10月

1923年（大正12年）「東京バプテスト聯合婦人会」10月

1924年（大正13年）「東京バプテスト聯合婦人会」3月

2. 阿部きし（三崎町教会伝道師）達の働き

1921年（大正10）年の春、現日本基督教番町教会で開かれた日本組合派の婦人総会を見学し300名余りの会衆を相手に議事進行を行った長谷川初音牧師の議長ぶりや婦人会だけの献金で婦人教師養成に阿部きしは触発される。これに驚き、人にも相談せず直ぐに東部組合内の諸教会牧師夫妻あてに「バプテスト聯合婦人会結成の時至れり」と手紙を送る。

1925年（大正14年）京浜全婦人会、東北、瀬戸内海、信州の婦人会から賛同を得「東部バプテスト聯合婦人会」を11月発足させ2年後に関西が合同した。

#### V まとめ

全国規模の日本のバプテスト派の婦人会の形成

の経緯は、アメリカの婦人宣教師らの養成と励ましにより、自覚が芽生え、大正時代の民主、自由主義から各方面に起こった婦人運動の影響を受けつつ、婦人会設立に向けた機運が整った。

1923年以降に実施されたアメリカバプテストの効率化を重視した全体的、組織的な宣教方針への変更も一因となり、日本女性の自立が促された。大正期の高揚した社会背景の中で関西地区を除く「東部バプテスト聯合婦人会」が1925年11月に発足する。全国規模としては、この2年後に関西地区が加盟することによって全国組織となった。

この組織形成における遅れは、バプテスト教会が個別教会主義を取っており、常に個別教会主義の自主、独立を重んじているために関西地区からバプテストの原則への問いが生じたからであった。しかしながら、個別教会では行えない全国規模の宣教活動を目指しバプテスト主義への抵触をさけながら1927年には全国規模へと発展したのであった。

『戦時下の女子学生たち—東京女子大学に学んだ60人の体験』（教文館、2012年12月、B5判904頁）を上梓して

堀江優子

■編著の動機、東京女子大学 私は1983年に東京女子大学を卒業後、書籍の編集を仕事としてきました。研究者でもない私が本書をまとめたきっかけは、たまたま出会った1945年9月卒の同窓生が吐露した「私たちには戦争によって学問を奪われた恨みがある」という言葉に強い共感を覚えたことにあります。国家権力が個人の思考を奪うこと。戦争という凄惨な殺戮の根っこは、案外その辺りにあるのではないか。そう考えた時、遠く感じていた危機が、実はごく身近に存在することに気づいて、ゾッとしたのです。

また東京女子大学は、1910年の世界宣教大会における「東洋にキリスト教主義に基づく最高教育機関を設置する」との決議を受け、当時日本で女子ミッションスクールを開設していたプロテスタント6社団（後に7社団）が主体となり、1918年に創立されました。日本のキリスト教女子教育の最高峰

という使命を担って誕生した学校で、この使命は戦時下にも強く意識されました。そんな関係で今回、横浜プロテスタント研究会の例会にお招きいただきました。

■本書の概要 本書は、戦時下に東京女子大学に在学した同窓生 60 名から、当時の体験をお聞きして記録したものです。戦時下（15 年戦争）の始まりは 1931 年の満州事変で、天皇制教育が強化され、千人針や慰問袋作りも始まりました。が、学徒に本格的な影響が及ぶのは 1937 年の日中戦争以降です。翌年に国家総動員法が成立し、学徒の勤労奉仕が始まり、徐々に動員が進みました。東京女子大学でも 1938 年 6 月の文部省通牒を受け、7 月から勤労奉仕や防空演習を始めています。そこで本書では日中戦争から敗戦までの時期に在学した同窓生を対象として、当時の体験を伺いました。

なお、敗戦後は深刻な食糧難や物資不足により授業時間や勉学の環境を浸食され、休学・退学者の復学や被災者への支援、戦中の認識が覆された戸惑いや混乱もありました。ことに 1948 年 4 月に新制大学に移行し、石原謙学長が退任するまでの時期は、戦時下と切り離せない過渡期です。そこで、1945 年に入学した同窓生——この学年が「戦中に在学した学生」の最後です——が卒業する 1948 年 3 月までの体験を記録しています。

聞き取りをした期間は 2006 年 7 月から 2010 年 1 月まで、また 7 月に若干の補足取材をしました。この間、延べ 101 名の同窓生に手紙を送付して、62 名に取材。そのうち 57 名の体験談を収載して、3 名のお話を補足的に注記に加えました。

■高等女学校での体験 体験談は原則として女学校時代から伺っています。同窓生の出身女学校（転校による重複含む）は、東京 40 校（公立 13、私立ミッション 17、私立ミッション以外 10）、地方 33 校（公立 27 そのうち外地 8、私立ミッション 6）、国外・租界 3 校。その他、卒業後に教師として勤めた体験も含め、戦時下における国内外の女学校の様子を垣間見ることもできます。

■内容紹介 最近、ある戦中世代の同窓生の「東女大は戦後、戦争中のことについて説明しなかった」という不満を耳にしたので、この不満を切り口に、1) 戦時下の石原学長、2) 戦後の教授の発言、3) 学生の心情と、3 つの観点から本書の体験談の一部を紹介しました。

例えば戦時下の石原学長については、同窓生たちの語る 11 のエピソードを紹介して、東女大の学問とキリスト教精神を守ろうと努めた尽力の一端にふれました（ex.チャペルと講堂の軍需工場転用を粘り強く拒んだ話／津田塾生の妹が全学礼拝に紛れ込んで石原学長の話聞き「この戦時下に平和という言葉は何度も口にされてのお話は、いくら聖書の話にしても……」と驚いた話／敗戦の日、中島飛行機学内工場の工場長が「これで戦争が終わったんだね。君たちの言っているような世の中になったんだよね」と言った話など）。

■発表後の質疑応答 まず私から、本書 734 頁で紹介された女性宣教師の言葉、「人生で最も大切なのは吾人が何を望んだかであって、何を成し遂げたかではない」について皆さんに尋ね、そこに神の意志が介在するとのことご教示をいただきました。戦争については、戦後「一億総懺悔」の下に為政者の責任が曖昧にされたことなどに話が及びました。また戦中世代からは、「戦争の悲惨や出陣学徒の真情など、実状がわかっていない」との指摘もありました。が、それでも戦後世代が戦争体験を知る努力は必要ですし、権力が日常を侵蝕し、学び（思考）を奪った過程は、戦争を考える上で重要な視点の一つです。個々人が主体的な思考と表現の自由を持ち続ける限り、容易に戦争を始めることはできないはずですから。

## 明治政府の宗教政策とキリシタン集落

内藤 幹生

明治六年（一八七三）にキリシタン禁制高札は撤去され、禁教が解除されたが、それは近世から近代への時代の転換を意味した出来事の一つであった。江戸幕府成立期以来続くキリシタン禁制政策は終焉し、キリシタンは長く久しい国家による規制から解放されたのであった。キリシタンは国家レベルにおいては信仰面において自由になった。しかし、村社会・地域社会においてキリシタンは却って忌避され自由にはなれなかった。本発表では、明治政府が政策上キリシタンを解放したことが、彼らを取り巻く村社会・地域社会にどのような影響を与えたか考察し、併せて禁教解除によりキリシタンと村社会の関

係はどのように変化したか見ていく。

当該期のキリシタン研究に関する先行研究は、外交問題と宗教政策の観点から詳細に行われてきた。しかし、キリシタンが宣教師により教育され、信仰を公表してからどのような動向を示し、それが村社会ではどのように影響し、どのような問題を起こしたかについてはそれほど触れられてなく、検討の余地が残されている。キリシタンの動向に関する研究は、宣教師から教育指導を受けた模様などのカトリックに関する信仰活動に関係することや、権力による弾圧に屈しないキリシタンの信仰心等を中心に行われてきた。キリシタンを取り巻く村社会の動向は見落とされてきたように思われる。また、カクレキリシタンの研究に関しては、古くから行われ多くの業績がある。しかし、禁教解除後、カクレキリシタンとカトリックに入信したキリシタン（復活キリシタン）に分派した時代的背景に関してはそれほど触れられてこなかった。本発表ではこのような問題点に注目し、キリシタン禁制解除が村社会にどのような影響を与え、キリシタンと村社会の関係がどのように変化したか検討した。

信仰が禁制であった近世期にキリシタンが露顕される事件がしばしば発生した。その時に村社会ではキリシタン・非キリシタンが一丸となり存在を否定した。キリシタン集落では村社会全体で信仰を隠匿したのであった。しかし、キリシタン禁制が解除になると状況は一変した。

禁教が解除となると、キリシタンは国家による規制から解放され、一定程度信仰は自由となった。しかし、村社会・地域社会からは自由にはなれなかった。村社会・地域社会内部では、禁教解除後も近世期から続くキリスト教邪教観が根強く残った。一方キリシタンは信仰を隠匿する態度からさらに公然と表明する態度を示し、集落の信仰に関する伝統行事を拒否するようになった。キリシタン集落内部は、伝統的な村社会を運営しようとする非キリシタンと信仰を公表し、自身の信仰以外を否定するキリシタンが衝突し、村内分裂の状態となった。

具体的には、明治政府の神道国教化政策の一環として伊勢大麻が配布された際に拒否したり、宗門人別に変更導入された戸籍の氏神・寺院の記載にキリシタンと書き記すなどして、政府の政策に対し自分たちの立場を明らかにした。キリシタンはあくまでも一定程度の信仰の自由を主張したのであった。

禁教解除後のキリシタンのそのような信仰態度により村社会の運営は支障をきたした。

また、禁教解除後におけるキリシタンの信仰をめぐる問題はキリシタン内部でも起こった。禁教解除による急速な状況変化に戸惑うキリシタンが現れた。カトリック入信を拒むキリシタンが現れたのであった。

キリシタンの信仰をめぐる近世から近代の移行は国家による規制から村社会・地域社会内部のせめぎあいへの変化と定義できる。

本発表は、昨年度大正大学において取得した学位論文の内容の一部である。なお、今後はキリシタンばかりでなく、近世期に異端とされた宗門やプロテスタント教界の禁教解除後の動向にも注目し、横断的に分析し、禁教解除の全体像を見ていくことを検討課題とす。

## 研究発表リスト（その36）

第343回 2013.2.16 諫山 禎一郎

「海老沢有道氏の『日本聖公会歴史資料解題』の整理、出版ほか」

第344回 2013.3.16 原 真由美

「東部バプテスト聯合婦人会の成立」

第345回 2013.4.20 岡部 一興

出版記念会：「『山本秀煌とその時代』を出版して」

第347回 2013.6.15 堀江 優子

「『戦時下の女子学生たち—東京女子大学に学んだ60人の体験—』この題名で教文館から出版

第348回 2013.7.13 内藤 幹生

「明治政府の宗教政策とキリシタン集落」

第349回 2013.9.21 石川 潔

「クララとヘボンのヘボン塾」

## 《お知らせ》

ヘボンの展示会が開催中です。是非見学して下さい。

「宣教医ヘボン—ローマ字・和英辞書・翻訳聖書のパイオニア—」10月18日～12月27日

場所：横浜開港資料館 [主催] 横浜開港資料館

[共催] 明治学院・横浜市教育委員会

明治学院創立150周年にちなんで、横浜開港資料館と明治学院歴史資料館が協力してなされた展示会です。